慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西部ソロモン諸島における民族学的調査の覚え書(上)
Sub Title	An ethnological note on the British Solomons I
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.3 (1965. 12) ,p.81(381)- 100(400)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651200-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西部ソロモン諸島における民族学的調査の覚え書（上）

伊藤清司

（一）伝承から

英領西部 Solomon の各地で蒐集した神話伝説のうちに、Vella Lavella 島民の成立・発展を物語るいくつかの伝承がある。

Vella Lavella 島はそれぞれ中心部で東西約 20 km, 南北約 50 km, やゝ東南・西北に傾いて長く、背梁に 8～900 m の山脈が走り、海岸部に僅かに平坦地をもつ。この島のほゞ中央部西寄りに Veala とよぶ 300 m ほどの丘があり、これが本島の名称の起因となつたといわれる。*この Veala Hill の更に奥地に、より高い Tu'umbuo 山があるが、その昔、遥か南の Savo 島から、Vella Lavella 島のこの山頂に移り住んだ Rasatitio と Melekovo の兄弟並びにその家族が、この Vella Lavella の島民の祖であるという伝承がある。同島西海岸 Paramata 部落の Lezutuni Silas（63才 但し推定年令 以下同じ）およびその父方の叔父 Neoh（75才）の語るこの Vella Lavella 開闢伝承は以下のとおりである。

【*同じ語を2つ重ねて用いる例はこの地方にも比較的多い。地名としては Mundi-mundi, Butu-butu, Visu-visu などもその例で、Vella Lavella は Veala-veala の音便変化と思われる。】

伝承第 1

Savo 島から来た二人の兄弟の話

昔々、Vella Lavella の島には、たゞ犬が、あちこちに棲みついていただけで、人間は住んでいなかつた。その頃、遥か南の Savo 島（註 Guadalcanal 島西北にある一属島）に、Rasatitio という Rakomo（呪術師）が住んでいた。彼には Mebekobo という弟がいた。

この兄弟の住み家の近くに、魔法の竹が生えていたが、その竹は風が吹くと、ゆれてガサガサ鳴り、そしていつも歌を唱い出すまことに不思議な竹であつた。二人の兄弟はこの不思議な竹があるので、いつも幸福であつた。*

【*この魔法の竹でつくつた笛を吹いて、呪術師は農作物の成育を促したともいう。類例を New-Guinea の東部高地民の中にも見出す。シアネ族・カマノ族その他の住民は、竹笛を祖霊のシンボルとして神聖視する。そして氏族の祖霊は作物を実らせ、子供を成長させ、豚を太らせるという。なお、西部 Solomon 地方の楽器は吹奏楽器と打楽器で、弦楽器はみられない。竹製笛はこの地

方の主要な楽器である。】

ところで、或る日のこと、一羽の teller-bird が飛んできて、その竹の先端にとまつた。これを見た子供（一説に弟の Mebekobo）は、小石を拾つて、その鳥めがけて投げつけると、鳥に当らずに、その魔法の竹の先に当り、折れてしまつた。そして、それ以来というもの、魔法の竹はもう歌うのを止めてしまつたのである。

兄の Rasatitio は、竹の歌う音が聞えなくなつたので、不思議に思つて、家から出てみると、竹の先端が折れまがつているのである。彼は弟に、「これは大変なことになつた」といゝ、Savo 島から Solomon の他の島へ移ることになつた。（一説に Solomon の他の土地に同じような竹はないかとさがし求めて Savo を出発した。）

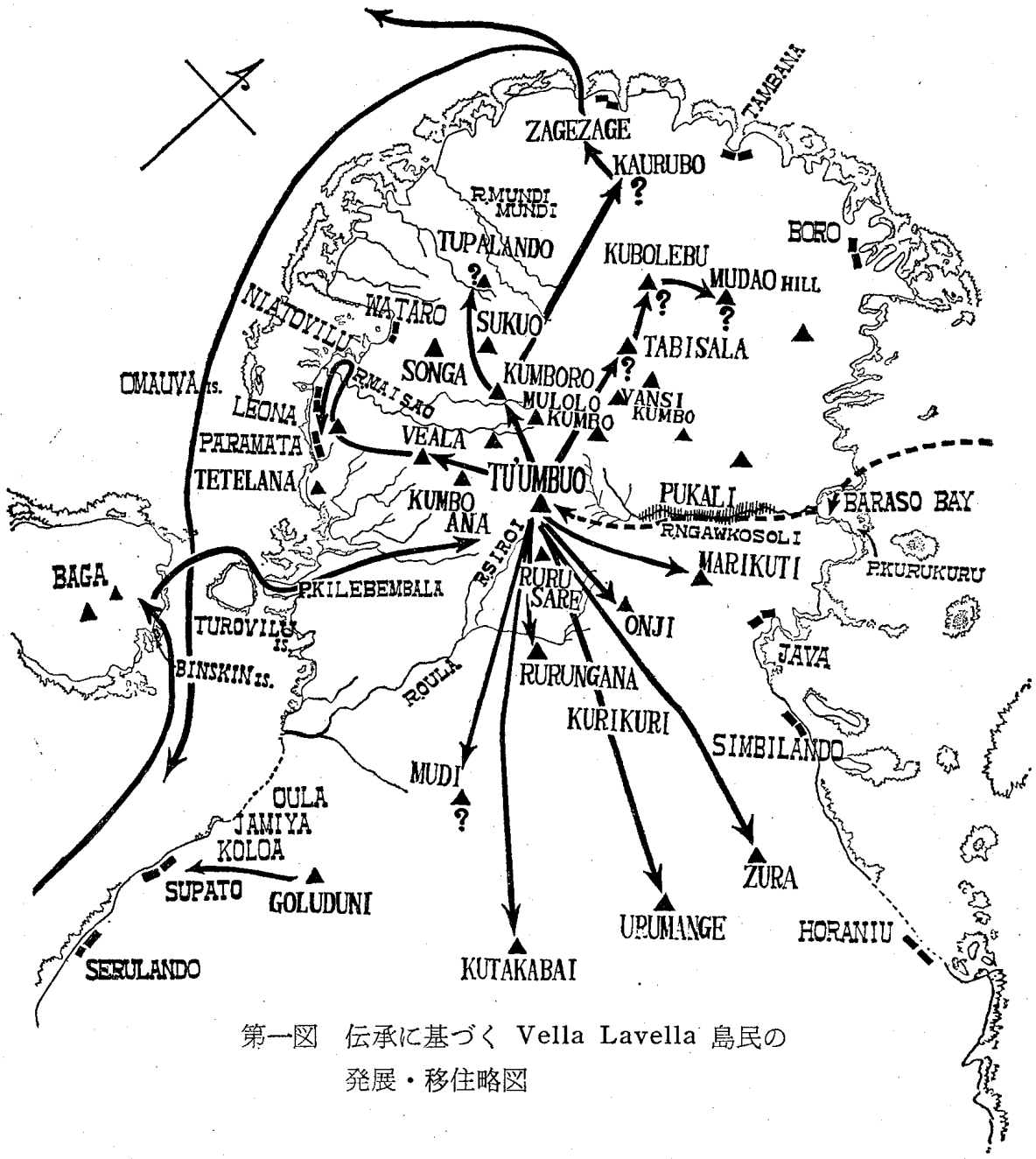
翌朝、二人の兄弟とその家族は、家財用具とその折れた竹、それに数羽の megapodo を伴い、Savo 島から旅立つた。まず、Savo から Visale（註 Savo の対岸に当る Guadalcanal 島の西北端）へ渡り、そこから西北へ進んで Simbo 島へ渡つた。彼らは Simbo に数羽の Megapodo を残して*、この島をあとにし、Ranonga（Ganonga）島へゆき、島のあちこちを捜しまわつたが、住むに余りいゝ土地ではなかつたので、Ranonga から、今度は Baga 島へ渡つた。この島へ着いて、彼らが「誰がこの島に住んでいるのか？」と訊ねると、蟹たちがあらわれ「こゝはわれわれの島です。あなた方が住むような場所はありません。」という返事。そこで彼らは Baga を立ち去り、対岸に当る Vella Lavella 島の Kilebenbala 岬に到着した。

*【Simbo-nusaに現在群棲している。土語でこの鳥をrapeとよぶ。】

人々はこゝでカヌーを捨て、Tu'umbuo 丘へのぼつた。そしてこゝを住み家ときめたが、竹を植えるために Pukali（註 Tu'umbuo 丘に源を発し、東流して Baraso 湾に注ぐ Ngawkosoli 川の上流域）に降り、こゝでまた Megapodo を放し飼いにした。（一説に、Pukali に降り、そこでめざす竹を手に入れた。）それから再び Tu'umbuo 丘にのぼり、そこに住みつくことになつたのである。彼らはまず家をつくり、畑を開いたが、そこはまことに住み心地のよい土地であつた。

彼らは呪術師であつたので、子孫は繁昌した。彼らの一族は Kubotoutou と呼ばれた。そしてその子孫たちは、やがて Tu'umbuo から Kumboro へ、そして Tupalando へ移り住み、一方、Tu'umbuo から Vealla へ、また Tu'umbuo から Onji へ、そして更に Onji の東の Marikuti へ。他方では Tu'umbuo から Mudi と Kutakabai へ。また Tu'umbuo から Tabisala へ。Tabisala から Kubolebu へ。そして Kubolebu から Mudao Hill へと移り住み、また一方、Tu'umbuo から Urumange へ。そしてまた Tu'umbuo の丘から Zura へと移り住んだ。このようにして Tu'umbuo は全 Vella Lavella の島民の母であつたのである。

第一図は上記伝承のほか二、三の伝承にもとづいて Tu'umbuo から Vella Lavella の主要地に広がつたいわゆる Kubotoutou



第一図　伝承に基づく Vella Lavella 島民の
発展・移住略図

族の発展の略図*であるが、つぎの第2の伝承は、この Tu'umbuo の丘が、かつて Vella Lavella 族の住地とされていた当時の社会を物語つている。

【*地図上の位置の比定はSilasおよびNeoh両者の教示によつた。】

伝承第2

WAGINA から来た六人の男の話

昔々 Wagina 島（註 Choiseul 島と Ysabel 島の間にある小島）の六人の男たちが、一人の女と一緒に、海亀とその卵を捕りに、Sikopo 島（註 Choiseul と Ysabel 間の Manning 海峡上にある Arnavon 群島中の小島の名。Wagina 島より東方約 20km に当る）に、カヌーで出かけた。二日かゝつて、たくさんの亀と亀の卵を手に入れ、暗くなつてから Sikopo を出発し、自分たちの部落のある Wagina へ向つた。

ところが、折あしく、天気がくずれ、風もつよまり、そうしている間に、陽もすつかり沈んでしまつたので、彼らは帰る方角を間違つてしまつたのである。そして Wagina を通り越してどんどん西方へ進んで、一晩かゝつて翌朝 Vella Lavella 島の北東岸にある Baraso 湾に流れついたのである。

丁度、そのとき Java 族たちが Wagina から来た七人の男女の漂着した Baraso 湾に魚捕りにきていた。一方、Tu'umbuo の丘から降りてきた別の一群が、Wagina の人々の上陸して休んでいた Kurukuru（註 Baraso 湾を囲む南の Gunguzo 岬上の地名）にきていた。

Java の人々は Tu'umbuo の連中にいつた。「奴らを殺そう。奴らは見知らぬ連中だ。どうして生かしておかれよう！」と。これに対し Tu'umbuo の人々は「殺してはいけない。われわれは彼らを Tu'umbuo の部落へ連れてゆこう。」といつて、Java 族たちを制した。やがて Java の人々は自分たちの部落へ帰つて行つたので、人々は七人の Wagina 族と亀と鰐（註 鰐が突然出てくるが、これを Tu'umbuo の人々が携えていたのか、Wagina の人々が亀と一緒にもつていたものか不詳）を伴つて、Tu'umbuo の丘へ登り、Siroi 川（註 西海岸へ注ぐ Oula 川の支流）の川上で、亀と鰐とを飼つた。

ある日、激しい雨が Tu'umbuo の丘に降り、そのため Siroi 川はあふれて、川上で飼つていた亀と鰐は川下の方へ流されてしまつた。

Wagina からきた女は、亀と鰐が居なくなつたのを見て、大変悲しみ、川岸に沿うて下つていつた。そして女はあちこち夢中で捜し廻つた末、やつとその二匹の生きものを見つけ出した。女は大変喜び、そこにとゞまつて、亀と鰐の世話をすることになつた。

ところで、Wagina の六人の男たちは、Tu'umbuo に来て、その六人の女とそれぞれ夫婦になり、また、一人の Wagina 女は Tu'umbuo の男と結婚していた。そして、Wagina 女の夫は、自分の妻が亀と鰐を追つて川を下つていつたことを知り、彼も妻のあとを追つたが、Oula 川の川岸で妻を見出し、こうして二人は亀と

鰐と一緒に、Siroi と Oula の合流地点で暮すことになつたのである。

しかし Tu'umbuo の人々が Wagina の女にいつた。「その土地はわれわれ Tu'umbuo 族のものではない。別の人々の土地です」と。この忠告をきいて Wagina 女の夫は「私は Kurikuri へ出かけ、そこの Sarapaito 族と Kaneporo 族に参つて、われわれが Oula の南の岸に住んでよろしいかどうかを訊ね、そして許しを願つて来よう」といつた。

Kurikuri の Sarapaito 及び Kanepore の二族は、その夫婦のほか、Wagina の男の家族に Oula 川の河畔に住みつくことを認めた。そこで、許された七家族はそこの Rurungana という名の小さな丘の上に部落をつくつた。

このようにして Wagina の男たちは Tu'umbuo の女たちと、そして Wagina の女は Tu'umbuo の男と夫婦となつて、Rurungana で暮すようになつたのであるが、その六人の妻と一人の夫は、Rurusare 族である。（註 Rurusare は Tu'ubmuo 丘の南側の隣接地の丘の名であり、こゝに住んだ clan (?) の名でもあつた。）そのため、彼らは Rurusare-Wagina という名で呼ばれた。

われわれ Rurusare 族の totem は鰐であり、われわれが決して鰐を捕えたり、食べたりしないのは、このためである。

伝承者 Lezutuni Silas (63才)

Silas が、この伝承の中でわれわれといつているのは、彼の母方の出自が Rurusare 族であるからである。但しこの伝承の最後に、彼は Tu'umbuo 族に属する Rurusare 族の totem 由来を語つたといつているが、これが必しも正確に鰐を totem とするに至つたいわれであるかどうかは疑わしい。

とにかく、Tu'umbuo 族の一氏族？Rurusare 族が鰐を totem としていたのに対し、かつて Tu'umbuo 丘と相対峙する Kumboro 丘の Kumboro 族から分れ、この島の北部で新しい集落を営んだ Kaurubo 族のうち、西方の Mono (Treasury) 島に渡つた一族が鳩を totem とするにいたつた由来を物語る伝承がある。伝承者は同じく Silas Lezutuni.

伝承第 3

GURURATOBO と KAURUBO 族の話

私 (Silas) の父の母方は Kumboro 族から出ている。昔、彼らは Kumboro の丘から Zagezage の方へ移住した。同族の人口が余り大勢になつたので分れ、Kaurubo 族が Zagezage に新しい部落をつくつたのである。

ところで、この Kaurubo 族の中に、Gururatovo という名の年老いた魔女がいた。部落の大人たちが畑へ出かけると、部落に残るのは子供らとこの Gururatovo だけであつたが、この老婆は部落民の留守中、子供を一人づつ殺し、料理して喰べてしまつたのである。親たちが畑から帰つてくると、子供が一人見当らないので、

他の子供らに訊ねると、その老婆が喰べてしまつたという返事。こうして老女はつぎつぎに部落の子供を喰べ、そのため部落には次第に子供が減つていつた。そこで人々はその老婆を殺してしまおうと相談したが、実はそれは大変むづかしいことであつた。という訳は、その老女は妖魔の精だつたからで、彼女を殺害することは非常に困難だつたのである。

ある日、部落の人々は老女には内証で集つて、その対策を相談し合つた。そして、合議の結果、このまゝこの Zagezage にとどまる限り、この老女のために次第に部落の人口が減つてゆくばかりであるから、とにかくこの土地から移らなければなるまいということになつた。全員はこれに賛成し、ある詭計を弄することにきまつた。

まず、人々は食糧を用意し、カヌーをととのえた。その時、老女の Gururatovo は人々がしきりに何か準備しているのに気が付いて、「なぜみんなは、こうして忙しくいろいろなものを用意しているのか？」「一体、どこへ出かけるつもりなのか？」と、部落の一人に訊ねた。その男は「われわれは、この島の別の土地へ移るつもりだ。こゝで大勢の子供らを死なせてしまつたが、このまゝにしていては、われわれ一族は亡んでしまうだろう。こゝはよくない土地だ」と答えた。すると老女は頷いていつた。「なるほど、それはいゝ考えだ。早速出かけるとしよう！」

その日、人々は竹筒を集めた。そして、老女にそれらを渡し、水を汲んでくるように頼んだ。老女は「よろしい。それじゃいつて来よう」と、竹筒をもつて谷川へ出かけていつた。だが、その竹筒に

はトリックが仕かけてあつた。底に穴を開けていたのである。そのため、老婆がココナッツの殻で長い時間をかけて、何回も何回も水を汲んで竹筒の中に注ぎ込んだのだが、いくらやつても、水が竹筒の上の縁まで貯つて来ないのである。そこで、老女がとり上げて竹筒の底を見ると、穴が開いていて、そこから水がジャージャー流れ出ているのであつた。

老婆が水汲みに出かけている間に、部落の人々は全員、Zagezage をあとにし、Muliki に向つて移動してしまつたのである。人々が詭計を弄したと知つた Gururatovo は怒つて竹筒を地面に叩きつけ、いそいで海岸へ駈けおりて、見まわしたが、そこにはもう誰一人として見当らなかつた。そこで、老女は人々の残していつたカヌーが無いものかと、あちこち捜し廻つたが、たまたま居き去られたカヌーにはみな穴が開けられていて、人々のあとを追うにも満足なカヌーが一隻もない。老婆は大変くやしがつたが、いかんともし難い。やむなく、海岸近くにあつた樹の下に行つて腰をおろした。

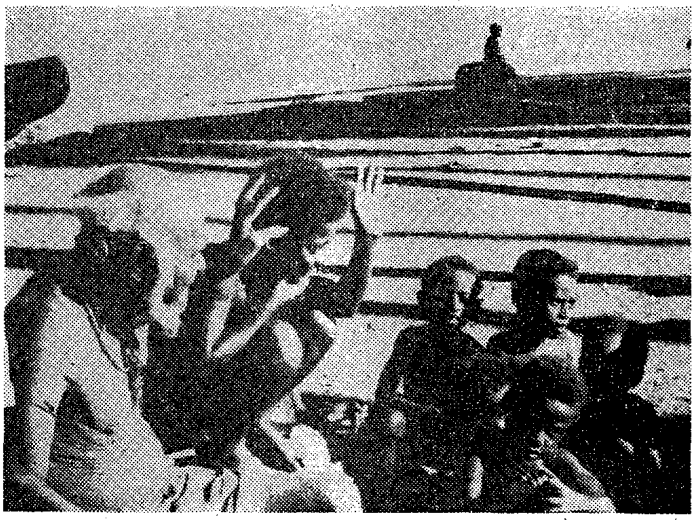
しばらくして、樹の上で一羽の鳩が鳴いた。この鳩は部落の人々が、連れてゆくのを忘れていつたのである。鳩は鳴いてこう告げた。

“Tulu, Tulu, Tulu, Lula Tiro-Muliki!” 老婆にはこの意味が理解できた。「部落の者が揃つて Muliki つまり Zodo（註 Shortland Islands の Mono 島を指す）へ逃げ去つた！」と鳴いていたのである。そこで、老女はどこかにカヌーがないものかと部落の中を捜し廻り、誰かゞ家の中に置き忘れた一つの亀の甲を見つけた。早速これを水に浮べてみると、うまく浮んだので、老女は、

さらに一本の櫂を見つけ出し、鳩をつれて、人々のあとを追つたのである。

Gururatovo の漕ぐ亀の甲の舟が違つた方角に進みそうになると、その度ごとに、鳩は鳴き叫び、こうして、老女はめざす Muliki の島へ真直に大海を進んでゆき、二、三日経つて、目ざす島かげを望見した。

老女は大層喜び、上陸したら、人々を皆殺しにし、全部を喰べてやろうと、心にきめた。



第二図　伝承を語る老人（Choiseul島Papara）

一方、Zagezage から来た Kaurubo 族たちは、到着すると木の葉で家を建てて住んだ。とにかく、人々はあの魔女があとを追つて、Muliki へやつて来ることがないだろうと思うと幸せだつた。もう Muliki に来てから三日も経つていたのである。

だが、四日目の朝、人々は海の彼方に、一つの小さい黒いものが浮んでいるのを見た。人々は最初、ココナッツの実か、丸太だと思つたのである。

さて、Gururatovo は島へ近づくと、鳩は老女の傍から飛び立つて、真直に人々の家のすぐ傍にある小さい樹の上に飛んでゆき、

"Tulu Tulu Tulu, Gururatovo ta lula sipole!"

と鳴いた。これは「クッ、クッ、クック、Gururatovo が近くについた！」という意味である。

人々は、はじめて、あの老婆が自分たちのあとを追つてやつて来たことを知つておどろいた。そこで、人々はいつた。「魔女がやつてきた。早速火をたき、寝床をつくつてやろう。そしてあの老女を寝床に坐るようにさせよう。そして坐らせて、穴におとし込み、熱した石を上からのせよう！」と。そこで人々はいそいで、火を起し、また穴を掘り、その上に柔かな木や枝をならべて、その上を敷物で被い、こうして老婆の上陸してくるのを待つた。

彼女が岸に近づき、亀甲のカヌーからおりて、人々に呼びかけた。

「お前たちは、こゝに居たのか！わたしゃお前たちをのこらず殺し、みな喰べてしまおうと思つて、やつて来た。お前たちはわたしをだまかし、大変いじわるをしおつた。そして、わたしをひとりおきざりにして、逃げおつた。だが、もう、わたしゃ、こうして追つてきた。お前たちを残らず殺してやるぞ。もう誰一人生かしておかぬから覚悟をおし。」

そこで人々は老女にいつた。

「まことに相済まぬことをばしました。さあ、いらつして、こゝにお坐り下さい。これが貴女のために用意した寝床です。さあ、火のそばによつて下さい。」

老女 Gururatovo は坐ろうとして、寝床の方へ行つた。すると床が破れ、老女はそこにあつた陥穴におち込んだ。すると人々は走り寄つて、火の中から焼けた石をとり出し、Gururatovo の体の上に投げ込んだ。こうして人々は Gururatovo を Mono 島の Toaloko 岬で、焼き殺したのである。

今日、Mono にゆき、島民に Kaurubo から来た人々が Gururatovo を殺したのは、何処か？と訊ねると、人々は、Toaloko 岬だと教えてくれるであろう。Mono の住民の多くは鳩を totem としている。一部の人々は鸚鵡または鷹を totem としている。

なお、Kaurubo 族の他の者たちは Vella Lavella 島の東に移り、あるものは同島の南へ、そして更に南下して Ranonga 島や Simbo へ移住したものもいる。

（二）西部 Solomon の原住民について

上記の伝承で、まず興味をひくのは第1の Vella Lavella 開闢説話の中で、無人の Savo から Vella Lavella への移住の伝承と、第3のこの Vella Lavella からMono への渡島の物語である。

Guadal canal 島西北の小島 Savo は Riesenfeld, A. 等によれば、Guadal canal, Malaita, Ysabel (Bugotu), Florida などの島々と一つの文化・交易圏をもち、この方面からの連続的な migration によつて、その住民・文化は相当に modify されているといわれる。しかしこの島の住民の original language は、その西方の Russell 群島のそれと共に、Non-Melanesia 語（＝Papua 語）に属することが、つとに Rivers, W. H. R. Ray, S. H. 等によつて指摘されている。すなわち、英領・豪領を問わず、この Solomon 諸島の原住民の間には、いわゆる Melanesian と総称される言語が用いられてきたが、その一部で Papuan の方言の顕著な十余の地域が存在することが報告されている。その多くは豪領の Bougeinville 島の山間部に分布するが、残り四地域が英領 Solomon で、うち二つがこの Savo 島ならびに Russell 群島であり、他は New-Georgia 島の西南にある Rendova 島（Baniata 語）と、そして Vella Lavella 島（Biloa 語）であるといわれている。（Ray, S. H. "The Non-Melanesian Languages of Solomon Islands, Festschrift für P. W. Schmidt, Anthropos, 1928. および New-Georgia 島の Munda に在る Methodist Mission Headquater の Chiar man である Carter 氏の説明などによる。）

他方、Thurnwald, R. によれば、（Im Bismarckarchipel und auf den Salomoinseln, Ztschr. f. Ethn. 42.）black skin で frizzy hair のいわゆる Melanesian type が顕著に見出されるに拘らず、Vella Lavella 島民は、より古い山地先住民との混血のあとを相当明白に認めうるものといわれ、また、その使用語においても、Melanesian と共に Papua 語の要素が多分に含ま

れていることが指摘されている。(Nicholson, R. C.: The Son of a Savage, 1924. Rivers, W. H. R.: The History of Melanesian Society, 1914. Ray, S. H.: The Non-Melanesian Languages of the Solomon Islands. Festschrift für P. W. Schmidt, Anthropos. 1928. etc.) 以上の諸報告に照してみると、Papua 語を original language とする Savo 島より、呪術師を中心とした集団が、よりよき生活の安定を求めて無人の島 Vella Lavella の山地に移り住み、この島の先住民となつたと語る上掲第1の伝承は、はなはだ示唆的であるといわなければならない。

つぎに第3に掲げた Mono 島民の由来を語る伝承は、第2の「Wagina から来た六人の男の話」同様、第1のそれに比し、比較的後の「歴史的」社会、すなわち、Vella Lavella 島住民のより増加し、発展した社会を背景にして理解しうるものであろうが、Thurnwald, R. の蒐集した伝承によれば、Mono 島民は Roviana (New-Georgia 島西部)から、移住してきたものであるという。すなわち、鳩の先導のもとに、舟航を続けた Roviana 族の一部は、Vella Lavella に移り、さらに Choiseul 島、Fauro, Alu の島々を経て、Mono 島に達したという。この伝承と、上掲其3のそれとは、Mono 島民のある過去を伝える variation であろう。そして、これらにみられる Mono への移住民は Papua 系の種族と見做すより、Melanesia 系と見ることの可能性が濃い。Roviana 地域は、奴隷としてもたらされた light-skin の Ysabel 島民や、Guadalcanal からの渡来者などの血を混えてはいるが、Melanesia 語を用いる black-skin が dominant であり、(Thurnwald, R. etc.) Papua系文化の根跡は、とくに指摘されていない。しかも Roviana 族は、空間的に西部 Solomon を包含する平時における交易と、異状時における首狩・略奪によって成り立つ文化圏、いわゆる "Black Spot" の中核をなし、(近森論文 Ⅲの㈥ を参照) しばしば、圏内各地に進出して、近隣に畏怖されてきたという事実*は、その消極的な根拠といえるかもしれない。

【*Vella Lavella 島の Paramata で得た伝承の中に、Kumboro 山上の集落時代、Roviana 族の襲撃をうけた折、その一酋長の首をおとすことができたという往時の武勲譚がある。そしてこの中で、ことさらに勲功が近隣の部落にも誇示するように力説されて伝えられてきたが、こうした伝承はかつてしばしば、Ysabel などへ遠征し、襲つた Vella Lavella の諸族にしても、尚かつ Roviana 族の勇猛に対しては、おゝむね受動的であつたことを示唆している。】

さらに Thurnwald, R. が、二度にわたつて Bougainville 南部地方の山地民 Buin 族の現地調査を行い、比較的近年 Mono 島よりの侵入者が、Papua 系とされる aborigin を征服し、これと混血したという報告をしていることは周知の通りで、現在また、Shortland 諸島の主要住民は典型的な "Solomon Islanders" すなわちもつとも black-skin の Melanesian type であり、Bougainville への侵略民は、この Melanesia 系種族であつたといわ

れる。

以上の諸仮説を背景にして、Vella Lavella 島民は、先住の Papua 系種族と後来の Melanesia 系族の混血によつて成立したものと考えられ、これは Vella Lavella 島における言語学的事実とも対応するものがある。

なお、Melanesian 系の dominant とされる Simbo 島民（Hocart, A. M.: The Cult of the Dead in Eddystone of the Solomons, J. A. I. Vol. 52, NS. 25, 1925 etc. 参照）の間では、同じ Melanesian を語る New-Georgia ならびに Ganonga 島民などに近親感をもつに対し、歴史的に Vella Lavella 島民を「よそ者」扱いをし、その死体の取り扱いに当つても、light-skin の Ysabel 島民などの奴隷と同じような処置をしてきている。（Hocart, A. M.）

さて、上に示した諸伝承は、もちろん、そのまゝ Vella Lavella 島の開闢と発展＝過去の事実を物語るとみるのは妥当でないだろう。伝承はあくまでも伝承であつて、こゝでも資料としての拡大解釈は慎しまなければならない。しかしながら、これら伝承を一班の例として、Solomon 島民の成立・発展の歴史的様態を示唆されるもののあるのも否めない。西部 Solomon が "Black Spot" としての一つのまとまりをもちながら、なおかつ Solomon 原住民が特定島嶼に定着し、一定の空間をのみ占有し続けるという定着性あるいは閉鎖的意識を、採集された諸伝承の中からは、強くよみとることはできない。後述する彼らの祖霊信仰などとも関連乃至は抵触し、問題も少なくないが、諸伝承にみるこのような移動性は、あるいは、彼らのよつて立つ粗放な焼畑耕作の生活様式と対応するものかもしれない。われわれが今回の調査で訪れた十数部落中、最近の分村・遷移の例を数部落で経験した。一例は、キリスト教信仰上の問題が主因となつた Vella Lavell 島西岸の New-Paramata ＝Leona 部落の成立の場合で、比較的近距離（約2km）の分村であるが、他の一例は Ganonga 島中部西海岸の Mondo（Ganonga）から北方約10数 km の Vori への移住で、前者は一九二六年以降。後者は一九二六年まず、Mondo（Patebe川）上流域の Manumanughu より現海岸部落 Mondo へ移り（missionary との接触が誘因）更にこゝから分れて一九四五年に Vori へ移住したと伝える。（但し、この実年代については検討の余地がある）Mondo—Vori 間には海岸低地がなく、内陸部の通行は殆んど困難で、島民は専ら舟航による。

今日この海域に関するよるべき地図は一九三九年製作の英国海図であるが、今日の地名との間に相当の不一致を見出す。これは海図そのものの不備もあろうが、同時にまた称呼の変更とともに、原住民部落の移動に負うところも少なくないのではないか。一九三九年の海図上の部落にして、今日廃絶せしもの、逆に現存する部落にして海図上に見出し得ないものも少なくない。なお、Simbo 島の名は、同島東海岸に接続する小島 Simbo nusa に部落を構成する氏

族名に由来するが、これらSimbo族は、東部SolomonのFlorida並びにGuadalcanal島におけるSimbo, Himbo族との間に分属・移住の関係のあることが考えられる。(Hogbin, H. J.: Social Organization of Guadalcanal and Florida, Solomon Islands. Oceania 1939. Vol VIII. No. 3. Rivers, W. H. R.: The History of Melanesian Society, Cambridge 1914. etc.) 地名等の比較研究は、Solomon原住民の移住・植民史研究上に有力な示唆を与えるかもしれない。

(三) 舟について

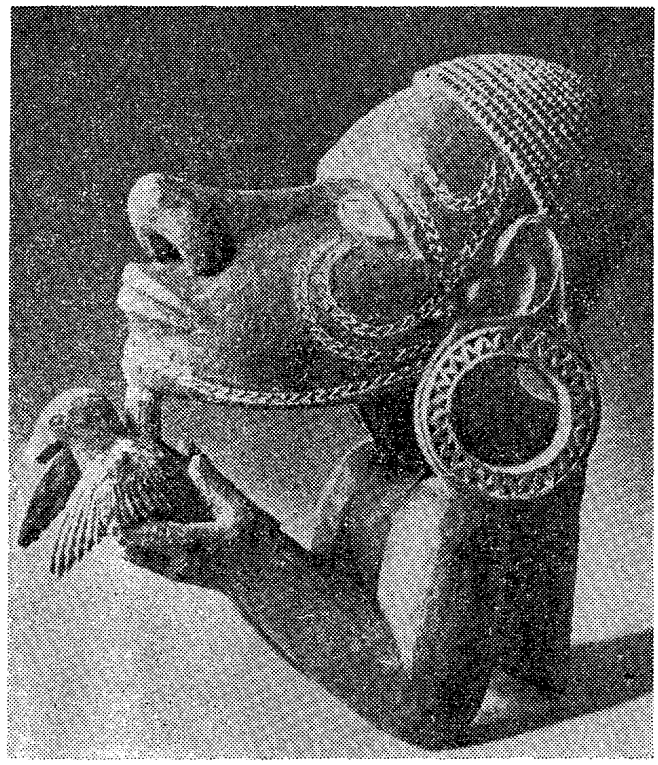
現在、原住民の往来は、その地理的環境から、専ら舟航による。海岸部にある隣村間においてすら、陸上通行の容易でない多島海のSolomonでは、海上利用がいちじるしく発達しているのは当然であろう。Hocart, A. はSimbo島民の体位について述べ、その脚部の発達せざる事由として、陸上歩行の少いことを指摘しているが、これは必しも賛同しかねる。白人によってpigeon toeとよばれている足趾、ことに親ゆびが極端にひらいた足の老人に会ったが、このハトのゆびは、かつてSolomon原住民に通有したものであるといわれる。そして、これは起伏の多いジャングル内を、疾走した往時の所産であるという。Hocart, A. の説明は島民生活における海上舟航の重要度を意味するものとして納得されるものがある。

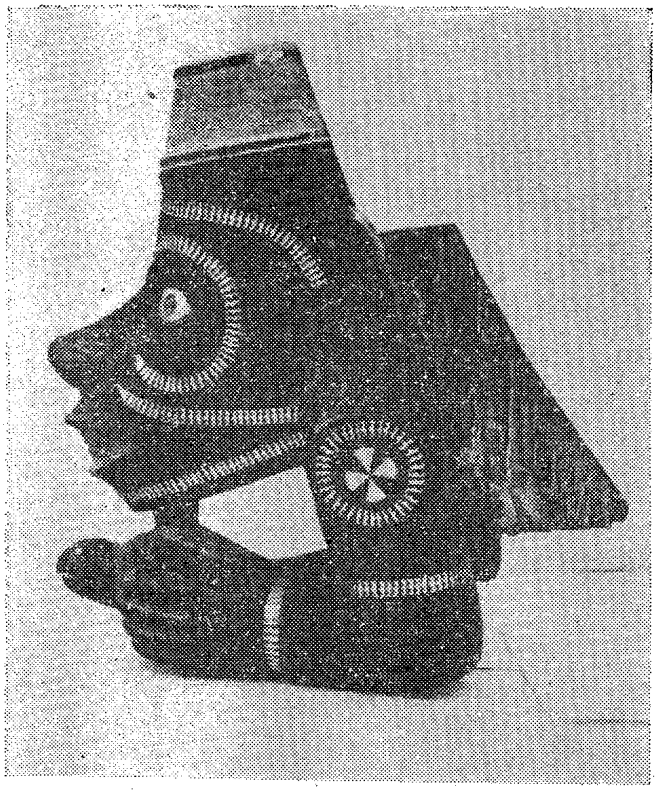
canoeはdug outのいわゆる独木舟と、舳・艫がともにいちじるしい反り上りのあるゴンドラ式で、上部を厚板で膠着・縫合した比較的大型のplank canoeに大別される。後者は白人接触時まで各島各部落において見ることができ、島によってそれぞれローカルカラーをもっていた。首狩りの習俗と関連をもつこのゴンドラ式の大型canoe=fighting canoeは、植民地政府の禁令などによるhead huntingの衰退とともにその存在意義を失い、太平洋戦争後はしだいに腐朽などのため消滅してしまったという。西部Solomonで

第三図　カヌー作り (Vella Lavella島Paramata)

は、わずかにNew-Georgiaの Viru-harbour に保存されているといわれているが、たまたま Choiseul 島北端の Sirovana で実見することができた。fighting canoe は多く、川口をやゝ遡つたしげみに直接撃留、ないし canoe house＝paele に蔵し、敵方の眼から隠蔽したというが、Sirovana でも、湾に注ぐ Pazu 河口より約150mの canoe house に、他の canoe と一緒にこの種の fighting canoe が二艘あつた。その大は全長 10m、最大巾 1.1m で舟底より約 2.5m に達する反り上り部の totoreke 上には、舳・艫ともに bagga 貝のはめ込み装飾。さらに舳上に、魚をついばむ軍艦鳥、水切部には神像 Ugogozu の木彫（第五図）がある。なお、この種のUgogozuに鳩を捧げもつもの（第四図）があるが、これは伝承第3に示したパイロットでありトーテムであるとされる鳩を思わせて注目される。さてこの fighting canoe は約二四人乗り、西部 Solomon の戦斗 canoe としてはおゝむね標準型に属する。

これら canoe による舟航の範囲は相等の遠距離に及ぶ。New-Georgia 島の Roviana 地区を中心にしていえば、東は Malaita, Florida, Savo, Gudalcanal, Ysabel, Choiseul の各島嶼、北ないし西は Simbo, Vella Lavella から Bougainville 南部





上　第四図　カヌー水切部木彫神像（New-Georgia 島）

下　第五図　同　上　Ugogozu（Vella Lavella 島 Paramata）

にまで達し、(Riesenfeld, A.: The Megalithic Culture of Melanesia, Leiden 1950) 他方、Simbo 島では、東は同じく Malaita 北は Shortland Is. や Bougainville, 西は遠く Murray islands (Torres Islands) などが、それぞれの head hunting area ないし、交易圏に包含されてきた。(Riesenfeld, A. および Simbo 島民) Simbo 島の独木舟が Ysabel 島民の技術によって作成され、Shortland からの輸入品である腕輪が島民に愛用されているなど (Hocart, A. M.) 有無相通じてきた。

なお、独木舟はおもに沿岸の舟航や漁獲などに使用されている。小型で安定性に欠けるが、原住民の手によって、相当の距離の通行に堪えうる。東部 Solomon には outliger を備えた canoe が相当に普及しているが、西部地区においては、弯曲・水平を問わず腕木は常用されていない。これは過去における消滅を意味するものか、いわゆる "Black people" が本来的にもたなかった文化なのか。

(四) 奴隷など

上掲の伝承第2の Wagina 族と Veala 族との通婚のように、多くは temporary であったと考えられるが、交易・斗争などによる communication を通じて、文化的な融合とともに種族的な同化混合を押し進めたことが推測される。Simbo 島の iama すなわち mortuary priest の調査を行った Hocart, A. M. の報告によれば、iama グループの chief の出身地はつぎのようになっている。

Narovo village—Mbui と Soge (Ysabel 島からの捕虜)
Ove village—Rona (Vella Lavella 島出身)
Karivara village—Lepo (Ysabel 島からの捕虜。なお、先任者の Tuete も同じ)
Simbo Village—Kainyira (Simbo 出身)

戦争における捕虜の捕獲は、文化形成上注目すべき問題であり、種族混合—Solomon 島民の形成上にも少なからず注目される。捕虜は後述の通り、祭祀の目的で捕獲され、殺害・供犠・食肉の対象ともされたが、生捕されて、襲撃民の島ないし集落へ帯同され、奴隷その他とされる例もきわめて多かった。さきにのべた Simbo 島に dug out作成の技法を伝えたという Ysabel man も奴隷であり、mortuary priest という特殊な職能をもつた Mbui, Soge, Lepo らもまた Simbo 島民から "light skin" とよばれる Ysabel 出身の捕虜である。同じく Ove 部落の iama の chief である Rona は Vella Lavella 族といわれるが、上述のように、この島民は Simob 族から「よそ人」扱いされている例をみれば、あるいは彼は Black people と違った体質を示していたのかもしれない。

捕虜・奴隷の処遇は必しも一応ではなかった。Vella Lavella 島西海岸 Supato 部落に接する Salve に住む老人 (heathen) Varo-vake が自から語る履歴によれば、彼は Ysabel 生まれであり、その幼少時代、首狩りに来襲した Vella Lavella島のGoluduni族 (当時 Supato の後背台地に同名の集落を構成していた) のため、その父は殺害され、馘首された。その折、彼と Sape-vake

および Siuku-vake の三人の幼い兄弟は、父の首とともに Golu-duni 部落に奴隷として連行された。一九二二年、missionary が Supato にあらわれたとき、40才以上で、当時、すでに部落の娘と結婚し、数人の子供をもうけ、自から部落の一戦士として Choiseul 島その他に数度の出草の経験をもつたという。

同じ Vella Lavella の Paramata でも同じような資料を得た。土語で Onanbaku と呼ばれた捕獲された奴隷は、身分的な差別が少なく、部落民との間で通婚し、戦争・略奪にも参加した。かような Onanbaku は Ysabel や Choiseul などから Veala 丘付近にも多数連行されてきて住んでいたという。（Silas の回想談）

Paramata 北方にある Leona 部落の Samu 老人（60才?）の語るところによれば、数十年前、武勇をもつて轟いた Savao（註　現存せず。Leona 北方の旧部落）の head man であつた Moro は三人の妻をもつていたが、子がなく、*Geregere という名の少年を養子として育てたが、彼は Bugoto すなわち Ysabel へ首狩りに往つた際に、同島より連行されたものであるといわれる。

【*Moro 酋長は避妊のため特殊な薬草を妻たちに与えたという。その理由として、Leona 部落民は head manはつねに stronger であらねばならないといゝ、しかし、すべての酋長はこのような慣習があつたのではないともいう。】

また Samu 自身についてみると、父（Rimizi）方の祖母 Tali-vuru は Savao 生まれ、同じく祖父 Vatokana は Kumboro 族出身であるが、母 Lydia の父母の出自は Ysabel であるという。

Pramata の Silas の家譜について、やゝ詳細に調取する機会をもつたが、その母方は四世代まで、父の母方は三代まで遡つて Kumboro および Tu'umbuo 族の出身であるが、父の父方の出自は Simbo 島にあり、祖々父母ともに Simbo 族であつた。Tu'umbuo 族や Kumboro 族の奴隷狩りあるいは首狩の対象地は、東方の Ysabel や Choiseul 島のほか、ときに南の New-Georgia や Simbo 島にも及んだという。ただし、Silas の父方の祖父 Soga あるいは Soga の父母 Emororo や Leaite と Vella Lavella 島の Veala 族との接触の経緯は明白にしかねた。

捕虜・奴隷はもちろん男子にのみ限つたわけではない。Simbo 島は従来、土民間に女護ガ島の評判があり、現にわれわれのこの孤島に渡る plan を知つた Baga 在住の土民たちは、porter として採用されてわれわれに同行する仲間を羨望するのを見聞した。Simbo の女護ガ島的風説は "Pinaosu" の習俗にもとずくもので、首狩・戦争のため襲撃した他島の女たちを多数捕獲し、これを妾婢として所有した。head man などの有力者はたいてい数名、普通の成人部落民も一人以上の pinaosu をもち、次の世代の戦士の産児・育成や豚の飼育、焼畑耕作などの労働に従事させた。なお、上記風説は head hunting・戦争の伝統的習俗が衰退し、貯妾・奴隷制が崩れて一夫一婦制への移行期に当つて、人口の過多を示した女性の一部に harlot的行為があつたことに基づくものとも考えられるが、むしろ、この harlot と結びつくような外者款待の習俗が存したのでないかどうか、あるいは Pinaosu が巫女的性格を伴つていたので

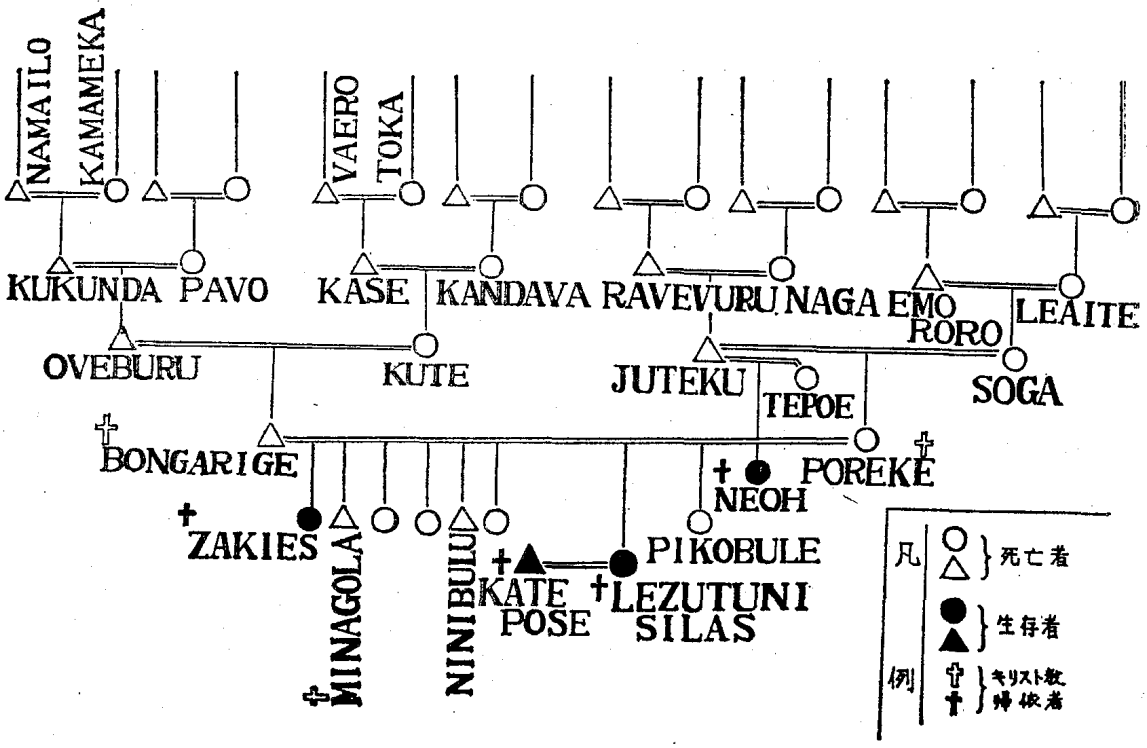
はなかったかどうかなど、問いたゞすべき問題が残されているが、今回の調査では確めかねた。

(五) LEZUTUNI の家譜

下表は Vella Lavella 島 Paramata の head man である Silas が語り、叔父 Neoh が補足した Silas Lezutuni の家系である。Silas は後述のように、おゝよそ四〇数年前、現 Paramata 北方2粁 Maisao 川の上流域の Maisao 部落在住当時、Methodist の missionary に接触。爾来自から同族の宣教に当つてきたが、彼自身いまだに鰐や鳩を taboo (土語で taite) として、これを殺し、あるいは食べることはもちろん、これらに触れることも憚つている。これは上の伝承2と3で言及したとおり、彼の母方の属する Reresare 族が、鰐 Esoro を totem とし、父方の Kumboro 族の totem が鳩 Turuturu* であったことに由来する。

【*Kurou と呼ばれる咽喉部に斑点のある鳩は殺害等も忌避されてない。Turuturu は喉に斑点なき種類。】

さて、下表人名のそれぞれの出自について概説すれば、母の母方は Tu'umbuo から別れて Veala 山頂付近にいた Veala 族出身で、母の父方および父の母方は Kumboro 族。Silas の説明では Veala 族と Kumboro 族の間には通婚関係が顕著で、胞族的関係にあるもののようであるが、これを家系上では証左し得ない。つぎに Silas の母の父の母方 Bolopo 族、同じく母の父の父方 Baba 族は同じく Kumboro 族に属しているが、ともに鳩 totem



第六図　Lezuturi Silas の家系略図

以外の totem をもち、同様に、母の母方 Rurusare 族の鰐 totem に対し、母の母の父方 Zabana 族は同じ Veala 族に属するが異つた totem をもつていた。(totem 名は明白になし得ない) Silas は通婚は異つた totem 氏族間で婿入婚により行われたといい、族外婚母権社会の存在が指摘された。*なお、Rivers は、西北部 Solomon に氏族組織らしきものなしいゝ、これに対して Thunnwald 等は母系氏族組織の存在を肯定しているが、Silas によれば Rere-sare, Zabana, Bolopoe などの語は、部落名であると同時に、その血族集団名であるといゝ、さらにこれらを一般的に呼ぶ場合、Toutou なる語を用いた。しかし彼はまた、これら Toutou なる血族集団のいくつかを包括する上位概念としてもこの語を使用した。Roviana 語では、Tuti-na は tribe, tribal desent または his tribe の意に、Tutu-ti は relation の意をもつといわれる。("A Roviana and English Dictionary" by J. H. L. Waterhouse, 1949. Sydney) Vella Lavella 語の Toutou は、おそらくこの Roviana 語と関係があろう。但し仮に Toutou を氏族集団を意味するとしても、実際には地縁的要素のつよい単系血族集団であつたと考えられる。

【*但し西部 Solomon でも bride-price の習俗が存することを示す資料も少なくない。別稿「英領ソロモン諸島調査概報」参照。】

(六) 過去の山間集落の生活

伝承第1に基づき、Veala 山頂遺跡発掘の結果、明らかにされた Veala 集落址は近森報告にみるとおりである。Silas によれば Veala に集落の営まれていたのは、母方の祖父母の Kute および Oveburu の時代であるというが、これは考古学的考察の結果によつて裏付けられる。*

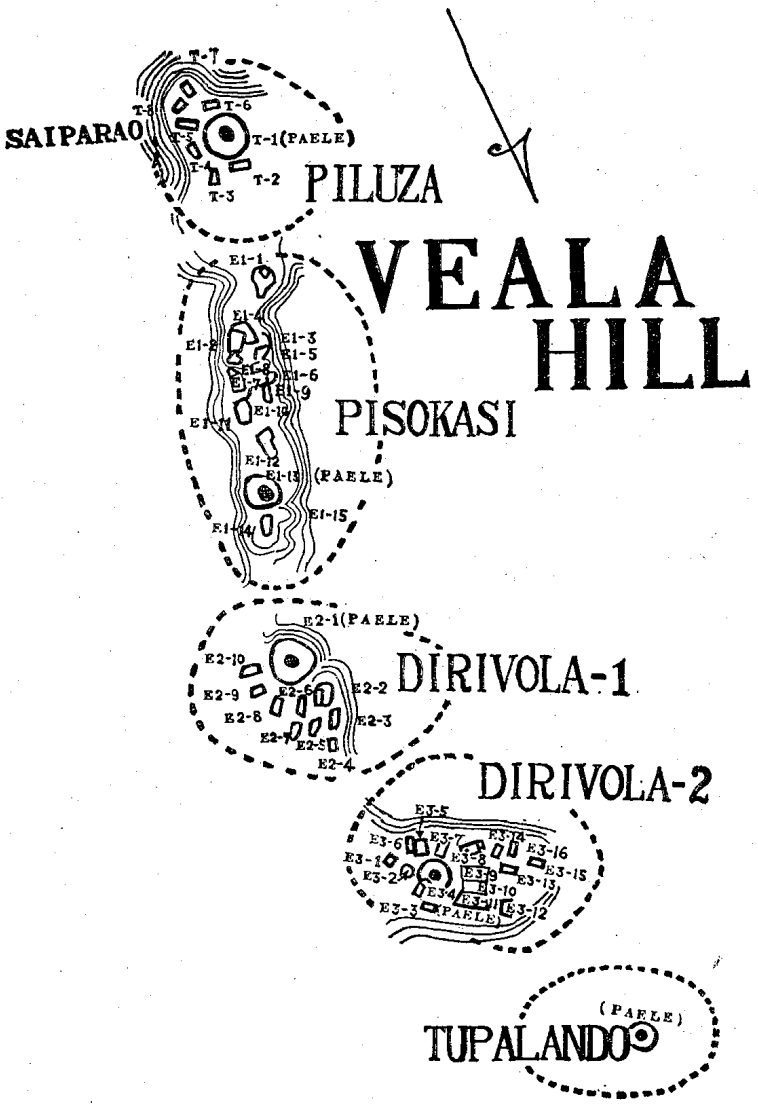
【*在 Solomon 四〇数年の経歴をもつ Mr. Palmer, A. E. (Gizo在住) の説明によれば、Veala 集落遺蹟E3セクション No. 8 住居址床面から出土した濃緑色のガラス片三点は、白人と接触当時、trader らの手を通じて、原住民社会にもたらされた角瓶の Dutch Gin Holland J. D. K. 2 の破片だという。原住民はこれら空瓶を入手して、髭剃り・剃髪・入墨などのための刃物に代用した。(後述参照)】

祖母 Oveburu の属する Veala 族と祖父 Kute の出自である Kumboro 族は、それぞれ Veala 山と Tu'umbuo 山の山頂を中心に集落群を構成し、ともにおゝむね四〇〇人の戦士、すなわち成人男子を擁していた。当時の人口数は戦士の数をもつて算えられ、婦女子はこれに含まなかつた。家族構成は夫婦とその子供らからなる単系家族で、ときに数家族が同居する例もあつた。この点、今日の海岸低地における居住様式と大異はない。質問に答えた古老たちは、例外なく子供の数は今日にくらべても、(白人接触後、死亡率が高く、人口の激減をみたが、最近、植民地政府、Mission 各派の施策により再び人口が増加しつゝある) きわめて多かつたといゝ、その一人は一家族少くも七・八人から十数名に達したと強調し

ていた。

Veala 山頂付近には約五〇人の戦斗員*とその家族が住み、集落は Paele と呼ばれる集会・来訪者接待所兼共同炊事場を中心に Piluza（発掘記号 T section), Pisokasi（同 E1 section）Dirivola（E2 section および E3 section）ならびにその東北に Toupalando（発掘せず）の四つの住居群からなつていた。（第七図）

【*T-E3 section の発掘の結果は四七戸の住居址を算えている。但し、各の section は Paele（計四戸）を含み、住居址がすべて一定時点に同時存在をしていたとはきめかねること、ならびに住居址の大きさに大小のあることを考慮すれば、Toupalando を含め、戦士約五〇人という人数および一戸に一家族、ときに数家族が同居していたという記憶と対応するものがある。】

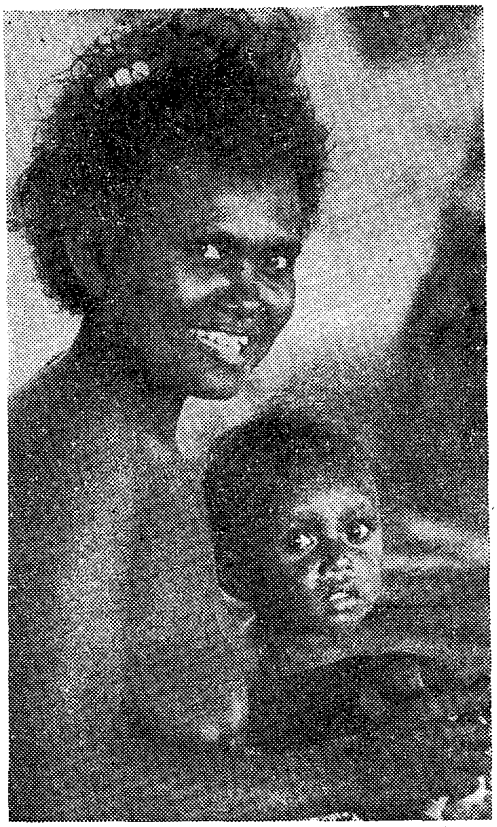


第七図　Veala 集落址略図

山頂平坦部の Piluza には Paele の東北に接して大酋長一族の住居が並び、この地点はとくに、Saiparao と呼ばれている。すなわち、右に前酋長の長女とその夫 Sengara の家族、左方に同じく次女とその夫 Walu およびその子供ら、そして中央に二人の姉の弟の Komenge の家族で、それぞれ発掘の T-2・T-4・T-3 がその住居址であろうと推定されたものの、これを語った Silas にも確認しかねた。Sengara および Walu は、ともに Veala 族の出身といわれる。母系社会で、Veala 族の政治的采配は長女の夫 Sengara にあつたが、酋長権は長老会議によつて決定されるのが例で、必ずしも世襲制によつてはいない。なお、Walu および Komenge も酋長の名でよばれたが、Sengara との間に grade があつた。

なお、Veala 山と対峙する Kumboro 山を中心に住む Kumboro

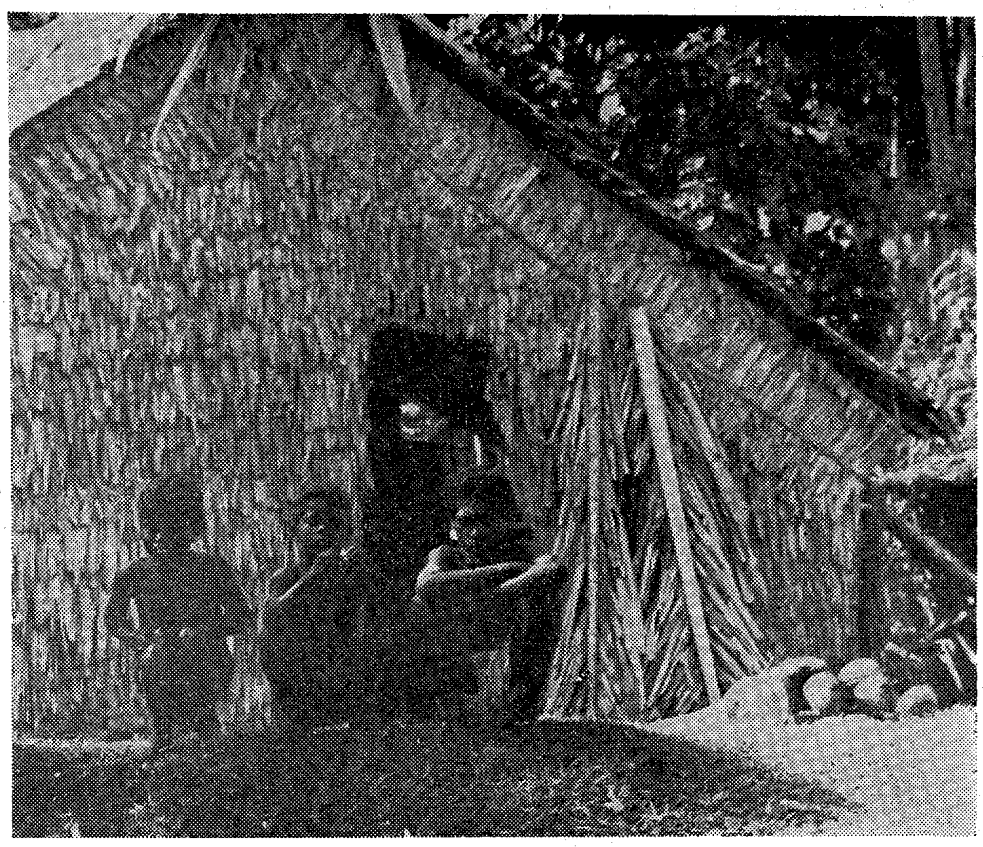
第八図　古老（Simbo島）



第九図　母と子（Ganonga 島 Mondo）

族も、ほゞ四〇〇人の戦士を擁する一大集落群を形づくっていたが、山頂平坦部に Robiojolu とよばれる住居群があり、この地区に大酋長 Vaevo ならびに Jeka, Rekio の二人の酋長の住居があり、Robiojolu の西方、やゝ山頂を下降した尾根部に Kokoroasi 同じく西南部に Okao, 東南部に Ovevola, ならびに Paipolaの住居群があり、これが Kumboro 族の中心をなしていたという。これら住居群がそれぞれ Paele を中心にしており、Veala のそれとともに、白人接触時までの山間集落期の典型的な集落様式を窺知することができる。

さて、Veala 山頂部の Piluza ブロックを中心にその北東に梁線を下降して Pisokasi, Dirivola さらに北東へ Toupalando の順で住居群が在つたことは、上述のとおりだが、頂上部ほど有能な戦士が居を占めていたということ、ならびに山頂部 Piluza ブロックに大酋長の一族が住居を構えていたこと以外は不明であるが、とくに階級制の存在を示すようなデータはなく、むしろ、それぞれ paele を中心に、拡大家族的なものが、住居群を構成していたのではないかと推定された。たゞし Dirivola 住居群の E-3 section の paele の東南に接する地点にSaruzaという名の老婆のRakomoすなわち呪術師*がいた。発掘記号 E3-5～6 が彼女の住家で、E3-2 の直径 4～5m の mound 状の特殊遺構はその祈禱呪術の場であつたという。Rakomo は呪術によって、疾病・怪我の治療をするほか、敵襲を予知することもできた。Veala 族が Kumboro 族と長期の斗争状態に入つたとき、(推定一〇〇年ほど前の事件といわれる) 老 Rakomo は、この mound によって山腹を匍いのぼる Kumboro 族の奇襲をしばしば察知し、人々に告げたという。Saruza は今日 Paramata 部落に住む Henry の母の父の姉妹に当るといわれ、終身未婚であつたという。Rakomo は死期が近づくと、自か



第十図　切妻平地式家屋と少年たち（Choiseul島）

ら選定した者の身体に触れて、後任の者をきめたといゝ、酋長権同様に必しも一定の世襲制によらない。

【別に*Baha, Basa, Vasa なるが語あり、男女両方の wich-craft に通じて用いられた。】

Rakomo は呪術師を意味するとともに、呪術それ自体をも指した。Silas はつぎのような Rakomo に関する伝承を語つた。

Dirivola に住んでいた Saruza は Rakomo の持主であつた。この老女は生涯独身であつた。もし部落の誰かゞ槍や斧で怪我し、あるいは戦争などで傷ついて Saruza のところへかつぎ込まれると、彼女はその負傷者の体に手を触れ、つぎのような呪文を唱えた。

Lolozo Tekuteku!　Balisou Tekuteku!
Gurosou Tekuteku!　Tupu Giligili!

人々はその傷ついた男を、Saruza の家の傍の小さい建物*の中に横たえるが、こゝには Saruza 以外には誰人も立入つて、病傷人を看ることが許されなかつた。

【観察の結果、おそらくこの建物は E3-5 に隣接する E3-6 であろう。】

Saruza は渓川へおり、水を汲んできて、その傷口に注ぎ、Rakomo Pazapaza（wild ginger*野生の生薑の一種）を患者に施薬し、傷口に手を触れながら、呪文をくりかえし唱える。

Lolozo Tekuteku!　（動脈よ　静まれ！）
Balisou Tekuteku!　（静脈よ　静まれ！）
Gurosou Tekuteku!　（血液よ　静まれ！）
Tupu Giligili!　（皮膚よ　閉じよ！）

【医薬*として用いられるほか、護符・ほれ薬などの調製剤として愛用される。】

Choiseul 島の Papara では、呪術師を Matezana と呼ぶ。同部落の Pirokena は呪術師の家に生まれた。三〇数年ほど前、missionary に接し、Methodist の教化をうけているが、いまだに部落内で Matezana としての職能を喪失していない。すなわち、部落民は植民地政府・キリスト教布教団の医師の治療・施薬をうけながらも、野生生薑等の薬草その他 Matezana の施薬を求めている。調査中 Vella Lavella 島の Paramata 部落で、ヤシの葉製の編籠をさげて歩く異風の男をよび止めて、訊ねたところ、彼は隣村 Leona の者で、Rakomo の子孫と称し、病人の施薬の帰りということであった。編籠の中に Pidgin English で trader より入手したと思われる meresena とよぶ胃腸薬等のほか、Rakomo pazapaza などが入れてあった。

第十一図　神憑りする呪術師と胸飾
（Choiseul 島 Papara）

Pirokenaの語るところによれば、Matezanaは特定の血族の間に伝えられ、男・女を問わない。Matezana が自から適任と信じる者を選定し wild ginger の木の皮と実、ならびに Matezana の間に相伝される呪物の貝製腕輪・短い杖・三日月型の貝製胸飾（第十一図参照）などを譲渡し、後継者とする。

Matezana はこれらの呪物を身につけ、さらに Zirowana（黄色い巴豆（ハヅ）の一種、香草）を頭・体・腕に帯びて、神がかりし、神託を告げる。まず、腕輪を右手にもって大きく円を描きながらゆるやかに呪文を唱え神霊を招く（第十一図）。神霊は呪術師の家の屋根の上に飛来し、様子をうかゞつているという。しだいにそのテンポが速まるにつれ、やがて Matezana はあくびをしはじめるが、これは招いて助力を乞うた神霊が Matezana の体内に入った証拠だという。あくびの頻度が繁くなり、Matezana は exstacy に達し、しきりに奇声を発しながら、託宣をする。この間、呪文の開始よりおゝむね十五分。たゞし時により長短あり。なお、神霊に善悪二様があり、善霊は犠牲者などの霊で、MatezanaのPirokenaに憑依するのはこれであるという。　（つづき）